

貧困による子どもの経験格差

加納広樹 谷川智紀 松岡洸太郎

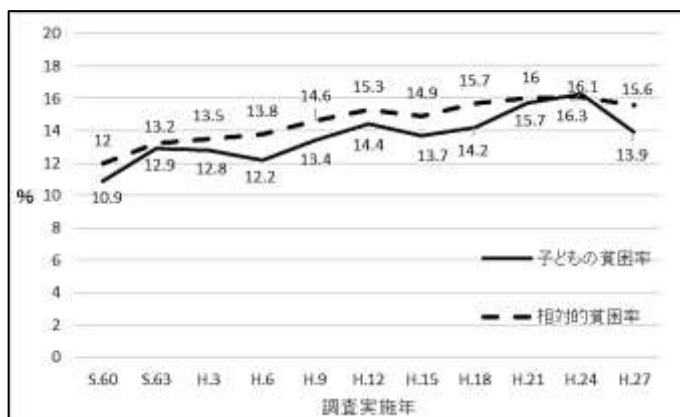
1. はじめに

本論文では「子どもの貧困」が子どもの経験にどのような影響を与えているかについて調べ、考察している。

私たちはゼミナール活動の中で「子どもの貧困」について興味を持った。子どもの貧困とは家庭が貧困状態にあることで、子どもも貧困に陥ってしまうことを言う。つまり人々が社会へ出る前からすでに格差が生まれてしまい、それが将来に持続してしまうのである。ここで言う将来に持続するというのは、例えば子ども時代に貧困状態にあることで教育の達成の度合いが低くなってしまい、社会に出たときに収入の少ない職にしか就くことができず、収入面や健康面、さらに産まれてくる子どもにまで影響が連鎖し続けるといったことである。「3. 考察・分析」でも触れるが、子ども時代に貧困に陥ると将来において望ましくない影響が出るということが知られており、その影響が持続し続けることが、子どもの貧困が問題と言われる理由である。

厚生労働省が発表した「平成28年国民生活基礎調査」によると、平成27年の日本の相対的貧困率が15.6%、子どもの貧困率が13.9%であった。つまり、日本では約7人に1人の子どもが貧困状態にあるという。また、昭和60年から徐々に子どもの貧困率、相対的貧困率は上昇傾向にある。そこで、私たちは子どもの貧困は貧困状態にある子どもにどのような影響があるのかを調べた。そして、子どもへの貧困の影響を大きく生活面・学習面・精神面の3つに分けた。この3つについて研究を進めていく中で、貧困状態にある家庭の子どもとそうでない家庭の子どもには、「経験すること」に多い少ないという差が見られることが分かった。私たちはその差が将来の子どもに大きく影響するのではないかと考え、具体的に研究を進めた。

図1 子どもの貧困率の推移



出所：厚生労働省「平成28年国民生活基本調査の概要」

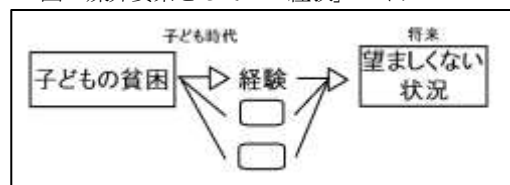
2. 課題の設定

2.1 リサーチクエスト

「子どもの貧困」について興味を持った私たちは、子ども時代に貧困状態にあった人が、将来望ましくない影響を受けている原因の1つとして「経験」というものがあると考えた。「経験」は子どもに習慣や知恵、学びなどを与える。その経験から得られたものが将来に影響を与える、つ

まり「経験が少ないことによって、将来望ましくない状況につながってしまう」と考えた。子どもの貧困の状況下にある子どもは貧困が原因で、「経験」できることが少なく、それによって貧困を受け継いでしまうと予想した。そこで以下のリサーチクエスチョンを立てた。

図2 媒介要素としての「経験」のイメージ



「貧困は子どもの経験にどのような影響を及ぼしているのか」

このリサーチクエスチョンに基づき、研究、調査を進めた。

2.2 調査の方法

「子どもの貧困」に関する文献や新聞記事、論文を読み、注目すべき点を見つけ出し、さらにその事柄について調査やデータを用いて、考察・分析を行う。

3. 考察・分析

3.1 子どもの貧困の実態

子どもの貧困というものは、子どもの自己責任論につながることはない。そして、子ども自身がその生活状況を変えることは難しい。子どもの貧困とは大人よりも「剥奪」の概念が適用されやすい。それを大きく「生活面」「学習面」「精神面」の3つに分けて研究を行った。

3.1.1 生活面

子どもの貧困の生活面への影響は、物質的な不足とそうでないものの不足に分けられる。

物質的な不足とは家がない、食べるものがないといったことだけではない。子どもの貧困とは相対的に貧困であることを指しているため、外見だけでは判断しにくいところがある。しかし、義務教育後に私費で購入する教科書や、部活動で使用する道具を買うほどのゆとりがなく、疎外感を感じてしまう子どもがいる。さらに、思春期後の子どもにとって居住スペースは重要な要素である。というのも、プライバシーが確保されていなかったり、安心して一人になる場所がなかったりすると、それが精神的不安定につながることもある。

物質的でない不足とは、例えば親と子が十分に向き合う時間が取れないといったことがある。親が長時間労働に従事している、またはひとり親であるため、子育ての時間が取れず、子どもはストレスを感じる。これにより子どもは精神的に不安定となったり、怒りやすくなったりと、衝動的になる影響が現れ、結果的に非行や不登校といった問題になる。

物質的な不足とそうでない不足の両面において、貧困は子どもの成長に伴うあらゆる機会を剥奪してしまっているのである。

3.1.2 学習面

(1) 勉学

子どもの貧困状態にある子どもは、学習教材を購入することができない、塾に通うことができないといった状況に陥り、それを理由に通学・進学を断念することがある。それに対して高所得の家庭では、子どもを塾に通わせ、勉学に励ませている。つまり、子どもの貧困に陥っている子どもたちからは「勉学に励む」機会が剥奪されてしまっている。

この機会の剥奪を解決するための取り組みがある。2015年に「生活困窮者自立支援法」が制定され、「生活困窮者自立支援制度」が作られた。この中には「生活困窮世帯の子どもの学習支援」というものがある。これは、地方自治体が子どもの学習指導から日常的な生活習慣や居場所づくり、進学に関する支援、高校進学者の中退防止に関する支援等に至るまでの子どもの明るい未来をサポートする支援を行うものである。その具体例として無料塾について紹介する。

無料塾とは貧困状態にある子どもの学習支援を無料で行うというものである。子どもの貧困状態にある子どもたちが無料塾に通うことで、学校の授業に付いて行くことができなかつたり、塾に通うほどのお金がなかつたりしていても、学習の支援を受けることができる。しかし、この塾には課題もある。それは、塾を運営するために必要な費用は一般の人からの寄付であるので、運営することが困難なケースも少なくない。また、無料塾は学習支援だけでなく、子どもたちの居場所づくりの役割も担っている。そのため、このような学習の機会、人と触れ合う機会を貧困状態の子どもたちから奪わない仕組みづくりが必要である。

(2) 学力

「学力」とは「人間活動における基礎となる学ぶ力」（三省堂国語辞典）という意味である。つまり人間活動にとって欠かせない能力でもある。特にこの能力は、貧困世帯が欠けていることが多い。東京都では毎年「児童・生徒の学力向上を図る調査」という調査を行っている。この調査で区市別に試験の点数結果が出ていたので、その結果と市区別の平均世帯年間収入を比較すると、平均年収が高い市区ほど試験の点数が高く、平均年収が低いほど試験の点数も低いという結果であった。つまり、貧困と学力というものには相関関係があるのである。

(3) 奨学金

現在、日本の大学学費は、初年度納入金が国立で81.3万円、私立で文系約115万円、理系約150万円にも上っている。また、高校入学から大学卒業までの教育費は子ども1人当たりで約1445万円(自宅外通学)かかり、家計に占める授業料等の在学費用の割合は平均で約2割、世帯の年間収入200~400万円の低所得世帯では約4割にも上ると言われている。子どもの進学のための費用は家庭にとって大きな負担である。最近では、親からの援助だけでは足りず、学費や生活費をまかなうために、学生の2.6人に1人にあたる約140万人が、将来の借金となる奨学金制度を利用している。

この制度は、貧困世帯にとっては非常にありがたいように思われるが、それは名前だけである。

というのも、将来の負担は大きいものとなっており、特に大学卒業後にそれが顕著に表れる。奨学金とは、「お金がない人に対しても学びの機会を確保して、その人の持てる可能性を最大限に発揮し、実り豊かな人生を実現できるよう支援する」ためにある。制度が始まった当時は無利子が当たり前だった。しかし近年では、大学卒業後に利子を付けて返済しなくてはならない有利子奨学金のものが多くなっており、大学卒業後の奨学金の返済という大きな負担が貧困から抜け出すことを困難としている。つまり、奨学金制度は返済を可能とするだけの安定した仕事と収入の確保が前提となっているが、近年では奨学金の返済が不可能となってしまった人が増加してきている。この原因の1つが、不安定労働といわれる派遣・契約社員、パート・アルバイトの非正規雇用の増大である。現代社会では就職困難の状態にもなっている。その中で、日本学生支援機構で、3か月以上の滞納者のうち46%が非正規労働者または、職のない人であり、年収300万円以下の人は約80%いる。このような雇用の崩壊は、非正規雇用やブラック企業が拡大したことも言える。

経済的に苦しい家庭の学生は、奨学金の返済の負担を減らすために在学中にアルバイトを増やさざるを得ないので、勉強する時間を制限されて不利になる。また、学生バイトと言ってもかつと違い、正社員並みの重い責任を負わされることも少なくなく、違法・無法なブラックバイトが蔓延している。もはや学生は学費と生活のためのバイトに追われ、最終的には高い学費、奨学金、ブラックバイトの「三重苦」がのしかかってしまう。前述にもある通り、就職困難であるため、望む仕事がなく、ブラック企業に就職せざるを得ない人々もいる。もしくは、返済の負担を考えて進学自体を断念する人や中退する人が後を絶たない状態となっている。文部科学省の調査(2014)によると、「経済的な困難」で大学・短大・高専を中退した人の割合は、中退者全体のうち、2007年は14.0%であったところが、2012年には20.4%と急増し、中退した理由のトップとなった。高い学費は高校生時代から将来の希望を奪っている。経済的な理由から4年制大学への進学を断念する高校生が年間約2万人にのぼるとも言われている。また、親には迷惑をかけたくないなどの理由からも進学をあきらめている子どもが多くいる。このように奨学金は貧しい家庭にとっては非常にありがたいものようであるが、大学卒業後働いてから何十年かけて返済していかなくてはならないものである。日本の奨学金制度は他の国の奨学金が無利子であるのに比べて有利子であるものが多いので、学校を卒業した後の将来に重い負担となっている。

このように、生活が困難な人々にとって進学ということは諦めざるを得ないケースが多く、勉強という機会を剥奪している。

3.1.3 精神面

家庭が貧困状態にあることで、子どもは将来への希望を見出すことができなくなってしまうということが、子どもの貧困が招く、子どもへの精神的な影響の代表例である。また貧困であることで、子どもが親に心配をかけるわけにはいかないと思うようになり、子どもは様々なことに対

して遠慮するようになったり、気をつけたりするようになり、精神面で不安を感じてしまう。それが原因で、将来、うつ病、統合失調症、不安障害などの精神疾患を患う人も少なくない。これは、ただ、物質的に貧しいだけでなく、人間関係に乏しいことが影響しているものだと考えられる。これらを発症する年齢が、15歳から30歳くらいだと言われており、子ども時代の影響が大きいことがうかがえる。

また、子どもの貧困を経験した子どもは、「学習面」でも触れたように、学校の勉強についていけないケースがある。そのため、就職の際に収入の恵まれた職業に就くことができず、貧困状態が継続してしまう。その結果、希望を見出せなくなる。さらに、教科書が買えないということや、部活道具が買えないといったことは、子どもに社会から排除されているという感覚を植え付ける。そのため、子どもは遠慮がちとなり、人との関わりを避けてしまう。その結果、勉強の例と同じように将来への希望を見出せなくなるのである。

このように、子どもの貧困は子どもに大きな心の傷を与えてしまう。

3.2.1 経験格差

3.1の調査で、貧困状態にある子どもたちは、様々な機会が剥奪されていた。そして、「貧困によって子どもたちが経験することに差が生じ、経験が少ないことで将来に望ましくない影響を与える可能性がある」ということを知り、興味を持ち、「貧困が及ぼす子どもの経験の格差」ということに研究の重きを置くことにした。

まず、「経験」という言葉について定義する。「経験」とは「主体に身体的・精神的に有用な能力を生み出させる過程」のことである。つまり、主体の未来に有用な影響を与える行動の過程を「経験」と定義(矢野 2003)する。この「経験」が何かしらの要因で多い少ないという差ができてしまうことを「経験格差」と呼ぶことにする。さらに、家庭の貧困が原因で子どもの経験格差を生んでしまうことを「貧困による子どもの経験格差」とする。私たちは、この「貧困による子どもの経験格差」に焦点を当てることにする。

3.2.2 子どもの体験活動の実態に関する調査

2010年、国立青少年教育振興機構が発行した「子どもの体験活動の実態に関する調査」の結果を見ていく。(ただし、この調査では上で定義した「経験」を「体験」と表記しているので、以下では本稿の定義に統一して、「体験」を「経験」に書き換えて記す。)この調査では、「子どもの頃の経験とそれらを通じて得られる資質・能力を検証し、人間形成にとってどの時期にどのような経験をすることが重要になるかを明らかにすること」を目的としている。調査方法は(1)青少年調査と(2)成人調査の2つに分けて行っている。(1)青少年調査では、調査対象を小学校高学年から高校生までの青少年、約11,000人と設定しており、「子どもの頃の経験(具体的には「自然体験」「動植物とのかかわり」「友だちとの遊び」「地域活動」「家族行事」「家事手伝い)」のこと

を表す)」に焦点を当てている。そして(2)成人調査では、調査対象を20代～60代の成人、約6,000人と設定しており、「それら(子どもの頃の経験)を通じて得られる資質・能力」に焦点を当てている。

(1) 青少年調査

青少年調査からは以下のことが興味深い結果として挙げられる。

ア) 経験の多い人ほど経験の力(研究では経験を通して得られる資質・能力には「自尊感情」「共生感」「意欲・関心」「規範意識」「人間関係能力」「職業意識」「文化的作法・教養」の7要素あると仮定し、これらを総括して「経験の力」としている⁽⁴⁾)が高い

イ) 経験の多い人ほど携帯電話の所有率が高い

ウ) 経験の多い人ほど本を読む 経験の多い人ほどゲームをする機会が少ない

(2) 成人調査

成人調査からは以下のことが興味深い結果として挙げられる。

エ) 経験の多い人ほど経験の力が高い

オ) 経験の多い人ほど最終学歴が高い

経験が多い人ほど年収が高い

この調査の結果から、子どもの頃の経験が多い人ほど生涯を通じて「経験の力」が高く、将来の学歴や収入に大きな影響を与えることが分かる。つまり、子どもの頃の経験格差はその子の性格や将来の生活に影響を与えているとすることができる。

3.2.3 平成23年社会生活基本調査

次に、2012年に総務省が実施した「平成23年社会生活基本調査」の結果を見ていく。この調査では「生活時間の配分や余暇時間における主な活動時間の状況など、国民の社会生活の実施を明らかにする」ことを目的としている。調査対象は選定された約8万3000世帯の10歳以上の約20万人である。

この調査に、子どものいる世帯における「行動率」と「世帯の年間収入」を取り上げた統計があった。この調査において、行動率とは「10歳以上人口に占める過去1年間に該当する種類の活動を行った人の割合(%)」のことを指している。そこで、統計をもとに行動の種類をいくつか抜粋して、行動率を縦軸、小学生の子どもがいる世帯の年間収入を横軸にとってグラフにまとめた。また、世帯の年間収入はIからVIの6つの区分に分けた。Iは世帯年間収入が300万円未満、IIは300万円以上500万円未満、IIIは500万円以上700万円未満、IVは700万円以上1000万円未満、Vは1000万円以上1500万円未満、VIは1500万円以上とした。活動の内容は大きく分けて「スポーツ」と「趣味・娯楽」の2つがあり、図1はスポーツにおける行動率、図2は趣味・娯楽における行動率と分けて作成した。

図1, 2よりほとんどの行動の種類において、世帯の年間収入が上がるにしたがって、行動率が

高くなっていくことが読み取れる。つまり世帯の年間収入が多いほど行動率が高く、世帯の収入が少ないほど行動率が低いのである。これは、家庭の所得が多いほど経験できることが多いことを意味しており、逆に所得が少ないことで経験できることは少ないということを表している。子どもの貧困状態に置かれている子どもの経験できることが少ない原因は、家庭の貧困によって道具をそろえることができない、お金を出すことができないという金銭的な理由が考えられる他に、貧困の連鎖によって親にある行動をする習慣がなく、子どもに行動をさせるきっかけを与えないことによって、子どもが行動をしないという周りの環境が影響しているという理由も考えられる。その理由に、このデータは小学生の子どもを持つ家庭を対象としているため、家庭自体に行動をしない原因がある可能性がある。

余談ではあるが、図4の「世帯年間収入と行動率（趣味・娯楽）」の「テレビゲーム・パソコンゲーム」の項目には興味を持った。区分VIの世帯年間収入 1500 万円以上の世帯の行動率のグラフの値が急に下がっているのである。私なりにこの理由考えると、「趣味としての読書」「演芸・演劇・舞台鑑賞」「美術鑑賞」といった教養を身に付けさせるような行動の項目の値が大きくなっていることから、親が子どもにテレビゲームやパソコンゲームに時間を割くのではなく、教養を身に付けさせるような、読書や鑑賞、勉強といった類の行動をさせているのではないかと分析する。子どもの行動には親の教育方針が大きく関わっていると考えられる。

それはさておき、「平成 23 年社会生活基本調査」から、家庭の収入によって経験格差が生じてしまっているということが分かる。

図2 世帯年間収入と行動率（スポーツ）

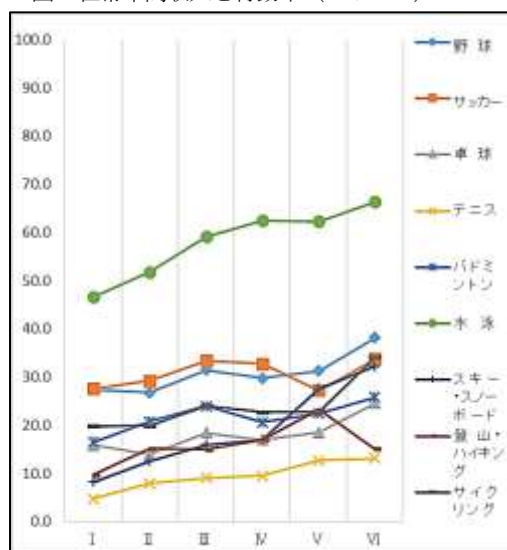
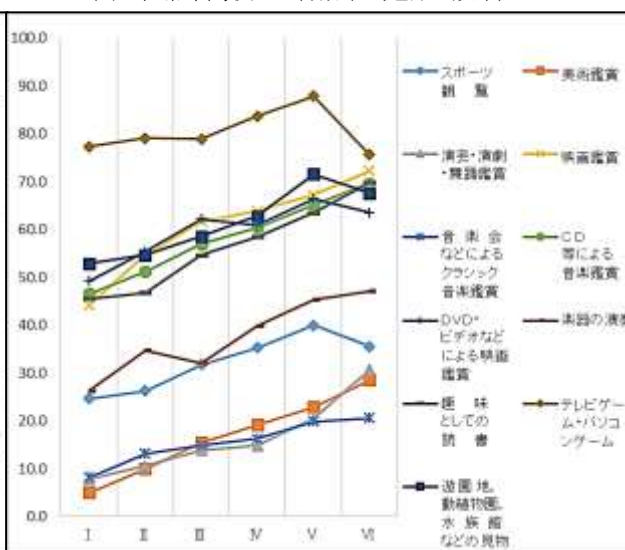


図3 世帯年間収入と行動率（趣味・娯楽）



出所：総務省統計局「成 23 年社会基本調査結果」

3.2.4 2つの調査から

「子どもの体験活動の実態に関する調査」と「平成 23 年社会生活基本調査」の 2つの調査か

ら、世帯の収入によって子どもに経験格差が生じており、その格差によって子どもの人格形成や将来の収入などに大きく影響を及ぼしていると考えられる。つまり、子どもの貧困という問題が「子どもの経験格差」という媒介要素を通して、将来望ましくない影響を与えているとすることができる。

子どもの貧困はあくまで金銭的な貧困の度合いに着目した概念である。しかし、貧困というものは金銭的なものだけでなく非金銭的な要素も持っている。その1つが「経験」と考える。非金銭的な要素を持つ貧困に関して、Townsend (1979) は「相対的剥奪 (relative deprivation)」と名付けた。この概念は「人々が社会で通常手に入れることのできる栄養、衣服、住宅、居住環境など物理的な面で事欠いていたり、一般的に経験・享受されている社会活動に参加できなかったりするなどの、『人間らしい生活 (decent life)』を営むうえで欠落している状況」(小塩 2013) を指す。「平成 23 年社会生活基本調査」からは、貧困状態にある子どもは「経験」の要素において相対的剥奪状態にあるということができ、「子どもの体験活動の実態に関する調査」からは「経験」が欠落してしまうと、将来、子どもにとって望ましくない影響が出てしまうと言われているのである。

2 つの調査からは、子どもにとって子ども時代の「経験」というものがいかに大切なもので、貧困とどのような関わりを見せるかが分かる。

3.2.5 経験格差是正のために

2 つの調査の結果より、子ども時代における「貧困による子どもの経験格差」は是正しなくてはならない。是正のためには世帯の年間収入関係なく、子どもに経験をする機会を与えなくてはならない。しかし、子どもに経験の機会を与えるのが各家庭だけでは限界がある。そのため、学校や自治体の取り組みが必要不可欠であり、教育現場での子どもの「経験」へのアプローチが必要である。

ここで、文部科学省が学校教育に取り入れようとしている「アクティブラーニング」というものについて考えてみる。アクティブラーニングとは「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を目指して行う、子ども自身に焦点を当てた教育方法である。この意義は「子どもの思考力・判断力・表現力は思考・判断・表現が発揮される主体的・協働的な問題発見・解決の場を経験することによって磨かれていく」ことにある。つまり、学校教育の現場でも「経験」の大切さが問われていることがわかる。この取り組みが教育だけでなく、子どもたちのあらゆる経験の機会が増えるような取り組みも必要であると考えられる。

4. 最後に

文部科学省の取り組みの「アクティブラーニング」の例にもあるように、子どもが成長するにおいて「経験」というものが必要であると認識されている。その一方で、「子どもの貧困」問題に

よって子どものたちの間で「経験格差」が生まれてしまっている。その格差をなるべくなくすための取り組みを学校、自治体、社会が進めていかななくてはならないのである。

注

(1)「体験の力」には7つの要素があると仮定している。それぞれの要素を代表する事柄は以下の通りである。

自尊感情：自分のことが好き、家族を大切にできる 等

共生感：休みの日は自然の中で過ごすことが好き、悲しい体験をした人の話を聞くとつらい等

意欲・関心：もっと深く学んでみたい、なんでも最後までやり遂げたい 等

規範意識：叱るべき時はちゃんと叱れる親が良い、社会のルールは守るべき 等

人間関係能力：人前でも緊張せずに自己紹介ができる、近所の人に挨拶ができる 等

職業意識：大人になったら仕事をするべき、社会や人のためになる仕事をしたい 等

文化的作法・教養：お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべき、はしを上手に使うことができる 等

参考文献

小塩隆士（2013）『社会保障の経済学 第4版』日本評論社

矢野智司（2003）「「経験」と「体験」の教育人間学的考察——純粹贈与としてのボランティア活動——」矢野智司／市川尚久・早川操・松浦良充・広石英記編著『経験の意味世界を開く——教育にとって経験とは何か——』東信堂

岩川直樹・伊田広行（2007）『貧困と学力』明石書店

神尾陽子・桃井眞里子・児玉浩子・山中龍宏・高田ゆり子・衛藤隆・原寿郎・水田祥代（2017）『子どもの健康を育むために——医療と教育のギャップを克服する——』日本学術協力財団

浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美（2008）『子どもの貧困——子ども時代のしあわせ平等のために——』明石書店

浅井春夫・中西新太郎・田村智子・山添拓ほか（2016）『子どもの貧困の解決へ』新日本出版社

Townsend, P. (1979) *Poverty in the United Kingdom: A survey of household resources and standards of living*. Penguin Books.

Ridge, Tess (2002) *Childhood Poverty and Social Exclusion*. The Policy Press.

厚生労働省ホームページ (<http://www.mhlw.go.jp/>, 2017年11月20日アクセス)

総務省統計局ホームページ (<http://www.stat.go.jp/>, 2017年11月20日アクセス)

国立青少年教育振興機構ホームページ (<http://www.niye.go.jp/>, 11月20日アクセス)

文部科学省ホームページ (<http://www.mext.go.jp/>, 11月27日アクセス)

東京都ホームページ (<http://www.metro.tokyo.jp/>, 11月29日アクセス)